

## 軍隊とロシア正教会

井上まどか<sup>1</sup>

2022年2月24日以降、ロシア正教会のキリル総主教はウクライナへの軍事侵攻を是認するような発言や行動を行っている。今日のロシア正教会と軍隊はどのような関係にあるのか。ロシア正教会は国家との関係をどのように考えているのか。本稿では、これらの問いに対し、1990年代におけるロシア正教会と軍隊との関係構築の過程をたどったうえで、軍隊とのかかわりにおいてロシア正教会が聖人を資源として用いている状況などを明らかにする。

<sup>1</sup> いのうえまどか：清泉女子大学文学部准教授

## はじめに——問題の所在

2022年3月13日（ロシアによるウクライナへの軍事侵攻開始から18日め）、モスクワの救世主キリスト大聖堂で行われた日曜礼拝にロシア国家親衛隊（ロシア大統領直属の治安部隊）のヴィクトル・ゾロトフ長官が参加した。

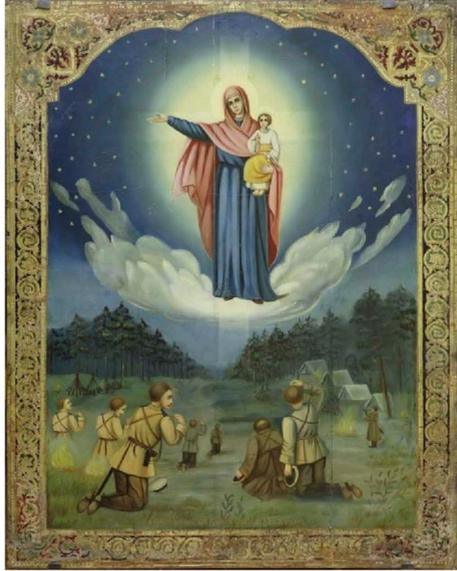
ロシア正教会のキリル総主教は、礼拝の最後にいたって、ゾロトフへ「アウグストッフの生神女（聖母）イコン」を贈呈し、そのイコンが「宣誓を行い、祖国を守る道を歩みはじめた国家親衛隊の若き戦士を鼓舞するように」との言葉を添えた<sup>1)</sup>。贈られたゾロトフはまずイコンに接吻し、「私たちはめざす目標にむかって一步一步進んでいます。勝利は私たちのものです。イコンはロシア軍を守り、すみやかな勝利をもたらすでしょう」と返答した。

日本の報道機関も伝えたこの一幕は、さまざまなメタファーに満ちている。

第一に、この日は正教会の祭日で「正教勝利の主日」である。遡ること8世紀にイコン破壊運動（イコノクラスム）を展開する勢力にたいして、イコン崇敬の正統性が確立されたことを祝う日で、復活祭に先立つ40日間の精進期間（四旬節／四旬齋）の1週目の日曜日（主日）に設定されている。ゾロトフへのイコン贈呈は、正教と国家親衛隊とが勝利というイメージのもと結びあわされたイベントだといえる。

第二に、贈られたイコンはロシア軍を勝利に導くものとして想起される。これは生神女（聖母）イコンのひとつであり、第一次世界大戦中の1914年、ロシアの東部戦線——当時はロシア帝国領内のアウグストッフ（現ポーランド領内）——で戦う兵士たちの前に生神女（聖母）が出現し、その後アウグストッフ近くで起きた大きな戦いで兵士たちが勝利をおさめたというエピソードにもとづく【図1】。

つまり救世主キリスト大聖堂における礼拝、およびそれにつづくイコン贈呈イベントは、ロシアの「勝利」を多重にイメージさせるものとして行われた。



【図1】 アウグストッフの生神女イコン（ベルミ国立アートギャラリー所蔵）

しかし、このエピソードは上述のような演出意図をよそにして「平和の実現に向けて努力すべき宗教界の長たる者が軍事行動を推進するようなことをすべきなのか」という疑問を生じさせることだろう。たとえば石川明人は「平和を謳うキリスト教がなぜ武器をとって戦うのか」という問いを立て、米軍のチャプレン（従軍聖職者）の研究をはじめとして軍隊あるいは戦争とキリスト教、戦争と平和のテーマの著作を公刊している。そのなかで、たとえば現在のカトリックの公式文書では正当防衛であれば戦うことも許容されることが言及されている<sup>2)</sup>。

ただ、ロシアによる軍事侵攻を「正当防衛」とみなすことは到底できない、という見解が一般的である。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻について、ロシア側はウクライナ領土にいるロシア人を保護するという理由のほかに、冷戦後のNATOの東方拡大は、米ソ首脳のあいだに交わされた約束を破っている、「西側」の価値観やグローバリゼーションには負の側面があり、それがロシアと共通の歴史をもつ「家族」であ

るウクライナ人に及ばないようにしなければならないなど、この軍事行動があたかも「正当防衛」であるような発言を行っている。しかし、国際社会からは正当な理由なき主権国家の侵害であるとみなされている。

それゆえ、ロシア正教会はなぜ軍事侵攻を擁護するのか、という怒りにも似た疑問が高まる。その疑問は、軍事侵攻を擁護するような姿勢をビザンティン帝国に端を発する正教会（東方正教会）自体が有しているのか、それともロシア正教会に特殊といえるものなのか、という問いへとつながるだろう。

本稿では、国家によって創設された軍隊の活動とロシア正教会の関係について明らかにしたい。それがロシア正教会に特殊といえるのかという問いへの示唆につながればと考える。

ロシアによるウクライナへの軍事行動は2014年にさかのぼる。この問題を仮に戦争論として西方キリスト教界も含めて考えると、アウグスティヌスの「正義」にもとづく戦争論（正戦論）まで射程に収める必要があるだろう。「戦争」をめぐる問題とするならば、「戦争」の定義をはじめとして、国際法分野における議論あるいは倫理的見地からの是非など踏まえるべき議論が膨大にある。本稿は、2022年2月24日のロシアによる軍事侵攻が直接の執筆動機とはなっているものの、その軍事行動がはたして「正義」にもとづくものといえるのか否かという点については扱わず、冒頭にあげたエピソードの背景を探っていくこととしたい。

まず、ソ連解体前夜から1997年までの国防分野とロシア正教会の関係を明らかにする。2000年代以降つまりプーチン政権下では軍隊とロシア正教会およびそれに大きく関わる愛国主義教育も新たな段階に入り、精緻な検討が必要である。ソ連解体前夜から1997年までの軍隊とロシア正教会の関係は、1997年の宗教法に明記される国家と宗教団体の協力関係に先んずるものとみなすことができるため、とりわけこの時期に注目したいということもある。

次に正教世界に聖伝として伝わっているもの（聖書と同じように信仰生活の指針となるもの）を参照したうえで、ロシア正教会の公式文書にみられる俗権や戦争をめぐる認識を明らかにする。また、ロシア正教会

が聖人をどのように資源として用いているかを検討し、今日の軍隊とロシア正教会の関係を浮き彫りにしたい。

## 1. 国防分野とロシア正教会の協力関係——ソ連解体前夜から1997年まで

ソ連解体後のロシア連邦において、国家と宗教団体の協力関係が明記されたのは1997年の「良心の自由と宗教団体についての」連邦法（以下「1997年宗教法」）である。すでに指摘したように、この連邦レベルの法律では宗教団体の序列化が図られている。15年以上活動してきたことを証明可能な団体は、国家・地方自治体との協力関係締結や企業設立などの諸権利を享受することになった。また法的拘束力のない前文においては、ロシア正教会が「ロシアの歴史、その精神および文化の形成と発展」において特別な役割を果たしてきたと述べられ、そのほかにキリスト教、仏教、イスラーム、ユダヤ教がロシアの諸民族の歴史と深く関わりがあるとして言及される。憲法や1997年宗教法の本文では宗教団体の法の前の平等が謳われつつも<sup>3)</sup>、前文では、いわゆる「伝統宗教」の頂点にロシア正教会が位置するかのような印象を与える表現がなされている。

いずれにせよソ連解体後は、1997年宗教法にいたって初めて慈善活動や教育など諸分野における国家と宗教団体の協力関係が明示されるが<sup>4)</sup>、ソ連解体後の国防分野と宗教団体の関係をみると、ロシア正教会が宗教団体のなかでは先んじて国家との協力関係を進めているのが明らかになる。以下では1997年までの道のりを確認しよう。

ゴルバチョフによるペレストロイカ（再構築）およびグラスノスチ（情報公開）提唱後の1988年6月、ロシアが正教を受け容れて千年を祝う「ロシア正教受洗千年祭」が行われた。これに先立つ同年4月29日、ゴルバチョフ大統領はロシア正教会のピーメン総主教（在位1971～90）をクレムリンに招いた。そしてソ連の宗教政策の過ちを率直に認め、対ドイツ戦争時代について「あの苦難に満ちた時代の聖職者たちの愛国的な呼び掛け、国防基金への大衆的な募金活動」が記憶に残っていると、

「信者たちから寄せられた資金でアレクサンドル・ネフスキー記念飛行中隊とドミートリー・ドンスコイ記念戦車縦隊が編成された」と、ロシア正教会の貢献を高く評価した<sup>5)</sup>。また、1990年6月17日、レニングラード（現サンクト・ペテルブルク）の聖イサアク大聖堂で約60年ぶりに行われた礼拝では、エリツィンが「教会が果たしてきた寄与は国民の道徳と浄化」であるとして、「国も精神的・道徳的価値のために教会とともに当然協力すべき」であるとコメントした。

つまりソ連解体前夜には、社会秩序の維持などを目的として、ロシア国民の精神的・道徳的陶冶という課題について国家と教会が協力体制をとることが念頭に置かれていたと考えられる。

国防分野とロシア正教会のつながりが表面化するのには、早くもソ連解体（1991年12月）直後の1992年1月である。独立国家共同体（CIS）連合軍が主催し、ロシアやカザフスタンの大統領および約5千人の上級司令官が参加したクレムリンの会議において、ロシア正教会のキリル教会対外関係局長（現総主教）は演説を行った。キリルは「軍隊の若手育成について、愛国精神や高い倫理的意識を向上させるために協力すること、および軍隊における民族的対立を克服することについてロシア正教会が〔軍と〕協力することについて準備ができています」と述べた<sup>6)</sup>。

さらに1993年6月、エリツィン大統領、国防相パーヴェル・グラチョフ、ロシア正教会のキリル府主教（現総主教）が軍事アカデミーの卒業生をクレムリンで迎えた際、キリルとグラチョフは公式会合の開催を打ち合わせ、同年7月の公式会合に至ったとされている。7月の公式会合には、教会対外関係局のフセヴォロド・チャプリンをはじめロシア正教会の高位聖職者や、軍の規律および兵士の道徳的・心理学的適否の判断などを担当する部署の局長が参加した<sup>7)</sup>。

このようにして1994年3月2日には国防相グラチョフと総主教アレクシー二世による共同声明が出される。その共同声明においては、ロシア連邦軍とロシア正教会の交流を目的とした共同調整委員会を設立すること、その委員会において科学的・文化的・霊的-道徳的分野での交流プログラムを開発し、ロシア軍の宗教状況を調査したうえで幹部に適切

な提言を行うこと、ロシア的靈性と祖国への忠実な奉仕の伝統を復活させるために協力し、軍人やその家族のケアを行うこと、また正教徒の軍人および家族に対して教区聖職者が司牧活動を行う場合の想定とその準備、要請に応じて靈的・教育的性格をもつ文献等資料を軍隊側に提供することを共同して行うことが宣言されている。

この共同声明にもとづき、連邦レベルではロシア連邦軍とロシア正教会との協力に関する調整委員会が設立され、地域レベルでは軍事管区(海軍)・軍事部隊とロシア正教会の教区とのあいだに調整評議会が設立された。

国防省側では、同年4月8日にロシア国防省参与会「ロシア連邦軍の利益を考慮して軍人および若者の軍事愛国主義教育を強化するための措置について」を立ち上げ、国防省の教育事業局に宗教団体との連携グループが組織された。

他方、ロシア正教会側では同年4月21日、ロシア正教会シノドの決定により、軍との協力は教会にとって最も重要な奉仕分野のひとつとみなされ、同年11月29日から12月2日に開催された司教会議において、軍隊および法執行機関との協力を携わる部局を創設することを決定した。これを受けて1995年7月18日、モスクワ総主教庁に「軍隊および法執行機関との協力課」が設立された。ロシア正教会シノドの報告によれば、当部局の設立(1995年)から2009年にいたるまで約2千人の聖職者が軍隊で奉仕したという。また、ロシア正教会の聖職者の報告によると、2000年時点での軍の駐屯地の聖堂数は教育施設附属や国境編成部隊のものも含めて117以上、非常事態省の駐屯地には20である<sup>8)</sup>。

連邦政府レベルでは、1996年4月、エリツィン大統領が指令「連邦聖職者の地位の発展について」(1996年4月15日付 No. 758)に署名し、ベルゴロド<sup>9)</sup>に軍の宗教教育機関を設立する問題について検討するよう政府に指示した。

1994年3月2日の共同声明の具現化のひとつは、以下のような軍事高等教育機関における正教に関する補充教育プログラムの創設である。1996年10月、モスクワにあるピョートル大帝記念ロシア連邦戦略ミサ

イル軍 (PBCH) 軍事アカデミーに正教文化学部が誕生する。このアカデミーは国立の国立高等教育機関であるが、正教文化学部自体は補充教育を実施する「非国家機関」と位置づけられた。正教文化学部の提供する補充教育は5年間にわたって土日祝日に実施されるもので、授業時間は学内400時間および学外(修道院や博物館の見学、教会での日曜礼拝および礼拝後の司祭による講義への参加など)1,100時間とされている。正教文化学部の学部長はロシア正教会の聖職者であり、学部長が教育プログラムの作成・実施を監督するとされている。正教文化学部の創設から16年の2012年4月の時点で、2,700人以上が正教文化学部で学んだという。正教文化学部の卒業生は、軍隊における司祭の活動を補佐する役割などを行うと想定されている。

1994年のロシア正教会と国防省と共同声明より後、同様のものが連邦国境局、内務省、緊急事態省、政府通信情報局などとロシア正教会のあいだで締結された。

そして1997年4月4日には、国防相ロディオノフとモスクワ総主教アレクシー二世は新たな共同声明に署名する。1994年の共同声明では「祖国への忠実な奉仕」という控えめな表現がなされていたのに対し、1997年の共同声明では「愛国心教育」が前景化する。「愛国心教育」と名指された項目では、「ロシア陸軍・海軍の正教の伝統を復活させる」ことや「兵役の道徳的動機、自己犠牲の能力、ロシアの利益のための英雄的な行為を兵士に浸透させる」ことを促進するために両者が協力することが明記されている。また軍の記念日や祝賀会にロシア正教会の聖職者が出席することも記された。

ここまでソ連解体前夜から1997年まで、軍隊と正教会の協力関係が構築されていく経過を確認してきた。この動きに対してどのような反応がみられたかを概観したい。

上述のように、1992年1月に独立国家共同体(CIS)連合軍が主催した会議で、ロシア正教会のキリル教会対外関係局長はロシア正教会と軍との協力を示唆している。が、モズゴヴォイによれば、同年8月に国防副大臣であるミロノフ大佐はグラチョフ国防相に対して「従軍聖職者の

組織化を即座に進めることは、軍隊の実生活の知識にもとづくものではなく、日和見主義的でポピュリストである」と指摘したという<sup>10)</sup>。

また1996年、上述の軍事アカデミーに正教文化学部が誕生する2ヶ月ほど前の8月7日、国防省の人事・軍事教育総局長のヴィソツキー大将は、連邦政府の宗教問題委員会での報告「軍事教育機関における教育の世俗的性格の遵守について」において、軍事教育機関におけるロシア正教会の影響力拡大に懸念を表明している。

1997年12月4～5日にモスクワで開催された全露学術実践会議では、ロシア軍における宗派不均衡について、ロシア正教古儀式派を含む他宗派からも批判が相次いだ。

たとえばロシア連邦軍参謀本部将校であり、かつロシア正教古儀式派の府主教補佐を務めるリャブツェフ大尉は、次のように批判している。「多くの理由（歴史的、政治的、経済的）により、現在、軍隊においてはただひとつの宗派だけが積極的に活動しています。モスクワ総主教庁です。モスクワ総主教庁はあらゆる厳粛な行事に参加し、旗、指揮所、船、航空機を聖化（奉獻）します。他宗派の信徒は不平等であると感じざるをえません。（中略）ある信仰の儀式は他宗派の信徒にとって否定的にとらえられています。冒涇されたと（その人にとって）感じられるような旗のもとで奉仕する必要があるでしょうか？」<sup>11)</sup>。

イスラーム界も同様である。ロシア・ムフティ評議会およびロシア中央ヨーロッパ地域ムスリム霊性委員会の議長であるガイヌッディンは、報告において国防省を鋭く批判した。軍隊とロシア・イスラーム界との連携は1990年代には進まず、初めて協定が結ばれたのは2003年5月に至ってである。その際、ロシア・ムフティ評議会と地上軍教育事業省とのあいだで協定が結ばれたものの、地上軍以外の部署との協定は進んではいなかった。

キリスト教の他宗派、たとえばプロテスタントの軍隊における活動は2000年代以降のものと考えられる。『軍事キリスト教徒教会報』（1999年国家登録）を発行している軍事キリスト教徒連合が公的に活動を開始したのは2003年である<sup>12)</sup>。

以上のように、1990年代の軍隊と宗教の協力態勢は、ロシア正教会が先鞭をつけており、他宗派との不均衡およびそれに対する批判が噴出した。先述のように、ロシア正教会と国防省は1997年に新たな共同声明を出す、そこで「愛国心教育」と明示されているのは、軍との協力関係は宗派に関わる問題というよりも、「愛国心」をめぐる問題であることを強調しているとも考えられる。

## 2. ロシア正教会の認識と聖人の資源化

最初に、正教世界（東方正教会）において聖職者の軍事活動がどのように認識されているかを確認しておきたい。

正教会では「聖規則（ノモカノン）」とよばれる諸文書が教会生活の指針として聖書とともに重視される<sup>13)</sup>。その基本となる「聖使徒規則」の第83条には、以下のようにある。

司教、長老、助祭で軍事活動を行っており、ローマ当局と司祭職の両方を保持したい場合は、聖位から除階されます。カエサルのはカエサルのものであり、神のものは神のものです。

「カエサルのは…」のくだりは、マタイ 22章 21節に依拠する<sup>14)</sup>。イエスのことばとしてよく知られているが、その場面を説明しておく。ファリサイ派の人びとがイエスを罾にかけようと、「皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか」と尋ねる場面である。イエスは彼らの悪意に気づき、税金を納めるデナリオン銀貨について「これは、誰の肖像と銘か」と問う。ファリサイ派らが「皇帝のものです」と答えると、イエスは言う。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と（マタイ 22: 15-21）。

聖使徒規則第83条によれば、軍事活動は経済活動と同じように、世俗的領域に属すものであり、神に仕える者である聖職者は従事すべきでないということになる。

聖使徒規則第83条の解説では、聖職者はそもそも「世俗的な事柄」に従事すべきでないとして同規則第6条と第81条が引き合いに出される。聖使徒規則第6条には「司教、長老、助祭は世俗的雑事を引き受けないようにすべきである。そうでない場合には聖位から除階される」とある。それでは、ほかの正教会の文書ではどのように記載されているだろうか。「聖規則（ノモカノン）」に含まれるカルケドン公会議（451年）の第7規則には以下のようにある。

いったん教会の聖職者や修道士として任命された者は軍務や官職に就かないという決定を私たちは行いました。あえてこれを行い、神の前にかつて選びとりしところへ懺悔をもって戻らない者は「アナテマ」に処すべきです。

この背景には、第一ニカイア公会議（325年）の第12規則がある。この規則では、いったんキリスト者となって「軍のベルトを脱ぎ捨てた」者がふたたび軍務に就くというケースがあることを認めている。そのうえで、ふたたび軍務に従事した者が回心する場合、聖堂の入り口近くで3年間聖書を読み、10年間聖堂で懺悔を行ったのちに受け入れると決められている。

以上のように、「聖使徒規則」には聖なる世界（神の領域）と俗なる世界（皇帝の領域）の峻別が見いだされる。また、カルケドン公会議規則によれば、軍務や官職などに従事した聖職者が再び教会に受け入れられるには長期にわたる懺悔が必要である。

他方、ロシア正教会は聖なる世界と俗なる世界をどのようにとらえているだろうか。帝政時代に遡っての考察は別稿にゆずるとして、ここではソ連解体後、とりわけ2000年8月にロシア正教会全主教会議で採択された文書に注目したい。

この文書は「ロシア正教の社会的概念の基礎」と名づけられたものである。1997年の共同声明と同様に、この文書でも「愛国主義」が中心にすえられる。それは「キリスト教的愛国主義」とよばれる。

正教徒にとっては「地上の祖国」と「天上の祖国」が存在し、正教徒は「天上の祖国」の一員であるが「地上の祖国を忘れてはならない」ことが強調される<sup>15)</sup>。

その主張の根拠となっているのは、権威やあらゆる制度が神から由来するものであるとして従うことをパウロが説くローマの信徒への手紙(13: 1-7) やペトロの手紙I (2: 13-16) などである。たとえば以下のような言葉である。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて、神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めにくるくことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。(ロマ13: 1-2)

主のために、すべて人の立てた制度に、従いなさい。それが統治者としての皇帝であろうと。(一ペト 2: 13)

ローマ信徒への手紙の13章の解釈史および影響史をあきらかにした宮田光雄によれば、この箇所(ロマ13: 1-7)は神学的な国家理論という性格をもつものではなく、当時の支配的な権力状況に対して、ローマのキリスト教徒がいかに振る舞うべきかをパウロが勧めたものとみなされるべきであるという。そして、政治的権威に対してキリスト者がいかなる態度をとるべきか、という根本問題については、パウロのこのテキストのみによるのではなく、「人間に従うよりも神に従う」ことを説いたペトロの証言(使5: 29)や権力が悪魔の様相を呈したときの服従の限界を明らかにしたヨハネの黙示録(黙13: 9以下)を合わせて読むことによって、「権威」や「服従」を一面的に理解することから免れると指摘している<sup>16)</sup>。

しかし、「ロシア正教の社会的概念の基礎」では正教会で崇敬される聖人には「地上の祖国」への愛と献身で有名になった人物が少なくないとして、トヴェリのみハイル王子(1271~1318)にまで遡り、「すべての時代において、地上の祖国を愛し、危険にさらされた場合にそれを守

るために命を惜しまないよう、教会は呼びかけました」と述べられている<sup>17)</sup>。ここには1997年の国防省との共同声明に記された「自己犠牲の能力」が端的に述べられている。

この文書には「戦争と平和」という章が設けられており、そこでも「自己犠牲」の精神が、ヨハネの福音書にある「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハ15:13)という言葉とともに強調される。以下、長くなるが引用したい。

キリスト教徒は、悪に満ち(一ヨハ5:19)暴力に満ちた「この世」にいるため、無意識のうちにさまざまな戦争に参加するという重大な必要性に直面しています。戦争を悪と認識している教会は、隣人を保護し、侵害された正義を回復することに関して、わが信徒たちが敵対行為に参加することを今でも禁じていません。次に、望ましくないものの強制的な手段である戦争が考慮されます。正教会は常に、自分の命を犠牲にして隣人の命と安全を守った兵士たちを最も深い敬意を持って扱いました。聖なる教会は聖人の中に多くの兵士を数え、彼らのキリスト教の美徳を考慮し、彼らにキリストの次の言葉を引用しました。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハ15:13)(下線筆者)

この文書においては、自己犠牲の能力を有した聖人、国防の役割を果たしたロシア正教会の聖人が高く評価されている。そしてそうした聖人たちは、今日のロシア正教会で軍隊の聖堂のうちにイコンとして置かれるだけでなく、守護聖人としての位置づけを得ている。

たとえばラドネジの聖セルギー(1321/22頃～1392)は、世界遺産にもなったセルギエフ・ポサードの大修道院の創設者として日本では知られるが、ロシアにおいてはタタール・モンゴルとの戦いにおいて、ドミートリー・ドンスコイの率いるロシア軍を祝福した聖職者として知られている。また砲兵たちを守護する聖人とみなされていたこともあった。

さらにネヴァ河の戦いでスウェーデン軍を破ったアレクサンドル・ネ



【図2】 使徒アンデレのイコン(18世紀末、キエフ(キエフ)地域)



【図3】 聖バーバラのモザイク・イコン(19世紀末、国立宗教史博物館所蔵)



【図4】 砂漠の聖エリヤのイコン(13-14世紀、トレチャコフ美術館所蔵)

フスキー(1220~63)は1547年に列聖されるが、今日、陸軍および海兵隊の守護聖人としてみなされている。

そのほか、ロシアの歴史上の人物ではないものの、正教会の聖人として軍隊と関連があるのは、海軍の守護聖人である使徒アンデレ【図2】、戦略ミサイル軍の守護聖人である聖バーバラ【図3】、そして航空宇宙軍と空挺軍の守護聖人である預言者エリヤ【図4】である。

それぞれの軍と守護聖人との結びつきはさまざまである。たとえば聖バーバラと預言者エリヤの場合は、軍の創設と聖人の記憶日が「偶然」一致したことから、守護聖人とみなされるようになった。戦略ミサイル軍創設が1959年12月17日であり、聖バーバラの記憶日と同日であった。また空挺部隊創設は1930年8月2日であり、預言者エリヤの記憶日と同日であった。

使徒アンデレの場合は、イエスの弟子になる前は漁師であったことか



【図5】 キリスト復活総主教大聖堂のアレクサンドル・ネフスキーのモザイク

© Наталья Сенаторова 2021 / CC BY-SA 4.0

ら、漁（師）や海に関する守護聖人とみなされてきたことが関わっていると考えられる。ロシア海軍の軍艦旗は「聖アンデレの十字」とよばれる白地に青の十字の意匠を用いている。

アレクサンドル・ネフスキーの場合は、2016年、キリル総主教の決定により陸軍と海兵隊の守護聖人とみなされるようになった。

これらの聖人は、軍隊に関する教会のイコンやモザイク画に描かれる。

たとえば2020年には対ドイツ戦争（「大祖国戦争」）勝利の75周年を記念して、キリスト復活総主教大聖堂がモスクワ郊外の「愛国者（パトリオット）」公園に建てられた。この大聖堂には、複数の礼拝堂があり、それぞれ預言者エリヤ、使徒アンデレ、聖バーバラ、アレクサンドル・ネフスキーの名が冠されている。

【図5】のモザイク画は中央上部にアレクサンドル・ネフスキーが大きい

く配され、向かって左側には988年にキエフ（キーウ）で臣下に正教の洗礼を受けさせたウラジーミル（ウォロディーミル）大公、向かって右側にはロシア正教会で最初に列聖されたボリスとグレープ兄弟が描かれている。その下には対ドイツ戦争におけるさまざまな戦いに参加した兵士が描かれ、「ブレスト要塞防衛」「ウクライナ、モルダヴィヤ、ベラルーシ防衛」「スモレンスクの戦い」「モスクワの戦い」と明記されている。

ソ連解体後のロシアでは、多くの聖人伝が出版されている。子ども向けに書かれたものもある。聖人伝には様々なエピソードが記されている。聖人が喚起するイメージを、軍隊や軍事行動と結びつけるというロシア正教会の手法は、聖人の資源化ともいえるだろう。

ほかにも多くの聖人が軍の守護聖人としてイメージ連関されている。たとえばサーロフの聖セラフィム（1759～1833）は森林に入って修行した隠修士として知られる。ソ連時代の1927年にサーロフ修道院を閉鎖し、その後刑務所として用いた。さらに1946年に核開発プロジェクトがはじまると、サーロフは核開発を行う閉鎖都市となった。ソ連解体前夜の1990年12月、レニングラード（現サンクト・ペテルブルク）のカザン大聖堂（当時は無神論博物館）がロシア正教会に返還されると、そこで聖セラフィムの聖遺物が「奇跡的に」発見されたと公表された。そうすると多くの人びとが聖セラフィムの故地である閉鎖都市サーロフに巡礼のように押し寄せたが、それはロシア正教会によって計算されていたことであったという<sup>18)</sup>。それと前後して、早くも1988年には閉鎖都市における霊的教育について国家-教会の協力の可能性が話しあわれている。

2019年には前述のフセヴォロド・チャプリンがマスメディアのインタビューに答えて、ロシアの安全保障に関する全ロシア人民評議会の公聴会で、ある正教会信徒が核ミサイルを「我が国の守護天使」と呼んだことを回想し、全面的に賛同する旨を述べた<sup>19)</sup>。このように、やや奇妙なしかたで（あるいはスキャンダラスに？）軍や武器とロシア正教会のあいだにイメージ連関が生まれている側面もある。

## おわりに

キリル総主教からゾロトフ国家親衛隊長官への生神女イコン贈呈の背景を導入として、1章ではソ連解体前夜から1997年宗教法までの国防分野とロシア正教会との関係構築について概観した。2章では正教世界の聖伝においては、聖領域と俗領域を峻別することによって聖職者の軍務従事が忌避されていることをまず確認した。次にロシア正教会の公式文書では俗権と聖権とが分かつたれておらず、俗領域への自己犠牲的な貢献が求められ、かつ、それがロシア史および正教史の聖人たちの「祖国」への献身によって正当化されていること、そしてそれらの聖人が軍の守護聖人としてロシア正教会と軍隊とのあいだのイメージ連関を形成していること、それは軍事行動とのかかわりにおいて聖人を資源として用いているということでもあることを明らかにした。

軍隊と宗教との関わりという点から考えると、兵士の宣誓をめぐる問題や実際の関与の仕方——信徒グループによる慈善活動の側面や聖職者による心理療法的な側面など——についてさらなる検討が必要であるが、今後の課題としたい。

## 注

- 
- 1) 贈呈の場面は以下のサイトで映像視聴可能。URL: <https://www.m24.ru/videos/obshchestvo/13032022/440022> (2022/12/5 閲覧確認)
  - 2) 石川明人『キリスト教と戦争——「愛と平和」を説きつつ戦う論理』中央公論新社、2016年、24-29頁。
  - 3) ロシア連邦憲法では第14条第2項、「良心の自由と宗教団体についての」連邦法では第4条に明記。
  - 4) 1997年宗教法の第18条第3項に「国家は、宗教組織の慈善活動ならびに宗教組織による社会的に有意義な文化—啓蒙プログラムおよびその実施に対して協力および支援を行う」とある。なお、この場合の「宗教組織」は15年以上の活動が認められる団体を指す。
  - 5) 廣岡正久『ロシア正教の千年——聖と俗のはざまで』日本放送出版協会、1993年、35-37頁。

- 6) Dmitry Adamsky, *Russian Nuclear Orthodoxy: Religion, Politics, and Strategy*, Stanford Univ. Press, 2019, pp. 19–20.
- 7) *Лукичев Б.* Патриарх Кирилл и Военное Духовенство (キリル総主教と従軍聖職者). 2015. С. 10–11.
- 8) *Мозговой С. А.* Взаимоотношения Армии и Церкви в Российской Федерации // *The Journal of Power Institutions in Post-Soviet Societies*. 2005. Issue 3.
- 9) ロシア西方に位置する都市で、ウクライナの国境まで約 30 km、ウクライナのハルキウから約 70 km。
- 10) *Мозговой С. А.* Взаимоотношения Армии и Церкви в Российской Федерации (ロシア連邦における軍と教会の相互関係). URL: <https://journals.openedition.org/pipss/390> (2022/12/5 閲覧確認)
- 11) 同上。
- 12) ロシアの軍事キリスト教徒連合連合長へのインタビューを参照。URL: <http://www.word4you.ru/news/10987/> (2022/12/12 閲覧確認)
- 13) 「聖規則(ノモカノン)」は、「聖使徒規則」などの初期キリスト教文書、公会議(全地公会・地方公会)などの決議、聖師父・教父の書簡から規則として承認されたものを指す。
- 14) 皇帝への納税をめぐるイエスのことばはマルコによる福音書 12 章 13–17 節にも見出されるが、ここでは依拠した文献に沿ってマタイによる福音書を挙げておく。
- 15) *Мчедлов М. П.* (общ. ред.) О социальной концепции русского православия (ロシア正教の社会的概念). М.: Республика, 2002. С. 257.
- 16) 宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史 = 影響史の研究』岩波書店、2010 年、27–28 頁。
- 17) *Мчедлов М. П.* (общ. ред.) О социальной концепции русского православия (ロシア正教の社会的概念). С. 258.
- 18) Dmitry Adamsky, *Russian Nuclear Orthodoxy*, p. 32.
- 19) 以下を参照。URL: <https://vz.ru/news/2019/6/21/983643.html> (2022/12/12 閲覧確認)

## 図版出典

図 5 「Главный храм Вооружённых сил Российской Федерации 2021 18」

[https://uk.wikipedia.org/wiki/%D0%A4%D0%B0%D0%B9%D0%BB:%D0%93%D0%BB%D0%B0%D0%B2%D0%BD%D1%8B%D0%B9\\_%D1%85%D1%80%D0%B0%D0%BC\\_%D0%92%D0%BE%D0%BE%D1%80%D1%83%D0%B6%D1%91%D0%BD%D0%BD%D1%8B%D1%85\\_%D1%81%D0%B8%D0%BB\\_%D0%A0%D0%BE%D1%81%D1%81%D0%B8%D0%B9%D1%81%D0%BA%D0%BE%D0%B9\\_%D0%A4%D0%B5%D0%B4%D0%B5%D1%80%D0%B0%D1%86%D0%B8%D0%B8\\_2021\\_18.jpg](https://uk.wikipedia.org/wiki/%D0%A4%D0%B0%D0%B9%D0%BB:%D0%93%D0%BB%D0%B0%D0%B2%D0%BD%D1%8B%D0%B9_%D1%85%D1%80%D0%B0%D0%BC_%D0%92%D0%BE%D0%BE%D1%80%D1%83%D0%B6%D1%91%D0%BD%D0%BD%D1%8B%D1%85_%D1%81%D0%B8%D0%BB_%D0%A0%D0%BE%D1%81%D1%81%D0%B8%D0%B9%D1%81%D0%BA%D0%BE%D0%B9_%D0%A4%D0%B5%D0%B4%D0%B5%D1%80%D0%B0%D1%86%D0%B8%D0%B8_2021_18.jpg)